



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第33主日 C年(2022年11月13日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：マラキ書 3章19—20a節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙二 3章7—12節

福音朗読：ルカによる福音書 21章5—19節

## 今、ここに、すでにある終末

「託宣<sup>たくせん</sup>。マラキによってイスラエルに臨んだ<sup>のぞ</sup>主<sup>しゆ</sup>の言葉」で『マラキ書』は始まります(1章1節)。そこで、マラキという名の預言者<sup>よげんしゃ</sup>が存在したかの印象<sup>いんしょう</sup>を受けます。しかし、「わたしの使者<sup>つか</sup>をわたしは遣わす」(3章1節 フランシスコ会訳)の「わたしの使者」はヘブライ語で「マラキ」であることから、後にこれを人名と誤解<sup>ごかい</sup>して、1章1節を加えたとするのが聖書学者たちの理解<sup>りかい</sup>です。ですのでマラキは架空<sup>かくう</sup>の人物であると考えてよいでしょう。

『マラキ書』の成立年代を考えると、1章10節、3章1節に「神殿」という表現があるところから、捕囚<sup>ほしゆう</sup>から帰還してエルサレムに神殿<sup>た</sup>が建てられた紀元前515年以前にこの文書<sup>しる</sup>が記されたとは考えにくいです。また、本文の中に「祭司<sup>さいし</sup>伝承<sup>でんしょう</sup>」と呼ばれる伝承<sup>でんしょう</sup>が織り込まれています。祭司<sup>さいし</sup>伝承<sup>でんしょう</sup>がまとめられたのはエズラ・ネヘミヤ(エズラもネヘミヤもペルシャから派遣<sup>はけん</sup>された総督<sup>そうとく</sup>)の時代で紀元前428年あるいは紀元前398年ですので、それより後にこの文書が書かれた訳ではないでしょう。そうしますと、『マラキ書』は神殿建設(紀元前515年)後からエズラがエルサレムに来る紀元前429年にかけて成立したと思われます。もちろん、その後の編集<sup>へん</sup>も加えられていますし、今日の第一朗読の直後3章22節から24節に記されている結論<sup>けつろん</sup>は、それまでの部分とまったく関連<sup>かんれん</sup>がありませんから、これも後代の加筆<sup>かひつ</sup>だと考えられます。『マラキ書』は十二預言書を締めくくる文書<sup>し</sup>ですので、この結論の部分は預言書全体をまとめる意味で付け加えられたのでしょう。

今日の朗読<sup>かしよ</sup>箇所は結論の直前の箇所<sup>しゆうまつぎ</sup>です。「その日が来る」と終末<sup>しきさい</sup>的な色彩の強い箇所<sup>し</sup>です。紀元前515年に神殿は再建<sup>さいけん</sup>されました。しかし、約束された主なる神さま<sup>あらか</sup>の栄光は現れません。

人々は待つことにくたびれ、待つことをあきらめかけました。信仰は形ばかりのものとなり、自分中心の生き方が蔓延したのです。『マラキ書』の作者は形骸化した信仰を批判し、神さまへの信頼を取り戻すようにと呼びかけました。神さまが来てくださる「その日」を信じて、今を力強く生きるようにと説くのです。

『テサロニケの信徒への手紙一』はパウロによって書かれたものとされています。それに対して『テサロニケの信徒への手紙二』についてはパウロが記したと主張する人々もありますが、一般的にはパウロの思想を受け継いだ人によって書かれたと理解されています。

2章2節に「あたかも、わたしたちが受けた靈感、わたしたちの説教や手紙によるものであるかのように『主の日はすでに来ている』と言われるのを耳にして、すぐに理性を失ったり動揺したり、うろたえたりしないでください」(フランシスコ会訳)とあります。「主の日」に関する誤解がテサロニケの教会にあったのです。「主の日」に向けて「黙々と働いて」(12節 フランシスコ会訳) 過ごしなさいと勧められています。

「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカの各福音書)には、イエスさまの受難と死、そして復活の出来事の前にエルサレムの滅亡と世の終わりを伝える話があります。これを「主イエスの小黙示録」と呼びます。『ルカによる福音書』では21章5-38節がそれにあたります。今日の福音朗読はこの小黙示録の前半部分となります。

12節で「これらのことがすべて起こる前に」とイエスさまは、世の終わりの出来事を空想することを中断するように語りはじめます。世の終わりに何が起こるかをあれこれ考えるよりも、今、これからお弟子さんたちが直面するであろう出来事に聞き手を集中させようとしています。そして、お弟子さんたちが直面する迫害についてイエスさまは語ります。言い換えれば、わたしたちキリスト者が直面する困難や迫害についてイエスさまは語ろうとしているのです。

世の終わりのことにばかりに関心が向いてしまい、今、この日この時がおそろかにならなれないのです。福音書が語りかける今とは「人々が手を下して迫害し」、「会堂や牢に引き渡し」、「わたしの名のために王や総督の前に引っ張っていく」、そんな今です。しかし、その時は神さまのことを人々に証しする機会となります。そのために聖霊はイエスさまを通じて、「対抗も反論もできないような言葉と知恵」を授けてくれるのです。

イエスさまのお弟子さんとして世の終わりである「今」を生きることは「親、兄弟、親族、友人にまで裏切られ」、時には「殺される」こともあります。またイエスさまを信じているが故に、「わたしの名のために、すべての人に憎まれる」こともあるのです。これが、お弟子さんたちの生きる現実の世界です。しかし、イエスさまは「忍耐」しなさいと勧められています。「忍耐」はギリシ

ア語でヒュポモネーと言うそうです。それは、「もとに」を表す接頭辞ヒュポと「とどまる」を表す「モネー」から成り立つ合成動詞だそうです。二重の意味があります。一つは神さまのもとにとどまることを願って、「辛抱強く神を待ち望む」の意味。もう一つはこの世にとどまりつつ、「この世の出来事を耐え忍ぶ」という意味です。ですから、「忍耐」は我慢に我慢を重ねて耐えるという意味ではなくて、神さまとの出会いを待ち望みながら、しかもこの世にあって耐え忍びながら生きていくことを指します。これこそが「今」を生きる生き方となるでしょう。「忍耐」する人は、仮に神殿の石が一つ残らず崩されてしまうような日が訪れようとも、神さまのおかげで髪の毛一本すら失われることはないのです。「忍耐」は、希望に基づくのです。

### 【ちょっとひと言】

キリスト教の信仰が伝える終末とは、世の終わりのことばかりではありません。遠い向こうにある世の終わりをあれこれ考えるよりも、「今」に焦点をあわせて生きることが求められます。世の終わりだけではなく、個人のいのちの終わりも、「今」に焦点をあてます。いつ訪れるかもしれない自分の死をあれこれ思いめぐらすよりも、「今」を生きるのです。

なぜなら、キリスト教の信仰に基づく終末は「今」、「ここに」、「すでに」始まっているからです。そして、日々の終末の体験の積み重ねの先に、個人の終末としての死があり、この世の終末としての世の終わりがあるのです。

例えば、日々の生活の中で自分のいたらなさを感じる時、わたしたちは終末を体験します。自分の力のなさを体験する時、終末はわたしたちに訪れるのです。自分の弱さや罪深さを感じる時も、終末の大きな体験です。反対に喜びや嬉しさを味わう時も終末への希望が心に芽生えます。

いたらなさ、無力さ、哀しさ、苦しさ、弱さと罪深さの体験を通じて、人はそれまでの自分に死んでいきます。新しく生きるためです。これが終末です。喜びと嬉しさの体験は、さらなる深い喜びと嬉しさがあることに気づかせてくれます。これが終末です。つまり、終末において古い自分に死に、新しいいのちへと希望を抱くのです。その点で、終末は日々の生活で「今」、「ここに」、「すでに」生じる出来事なのです。

終末の体験をするのは、秘跡においてです。なぜなら、七つのどの秘跡であっても古い自分に死んで、新しいいのちを生きるようになるからです。洗礼は水で洗われることを通じて古い自分に死にます。堅信は油を塗られてキリストのいのちを生きるようにと招かれます。そして、何よりも聖体の秘跡とミサ聖祭は、終末の体験となります。ご聖体を自分の手の中において、それを手に取って拝領するとき「新しいいのちへと生きられますように」と誰もが願うからです。事実、ミサ聖祭を通じて、わたしたちは新しく生きるようになるのです。